
大好きな人。

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きな人。

【Nコード】

N2463S

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

たった2歳。でもその差がもどかしい。
近付きもせず、広がりもせず。
ずっとそこに存在し続けている。

ずっと近くにいた人だから。
そのままいてくれると思ってた。
知らなかった、気付いてなかった。

・・・でも、誰かに取られるなんて嫌だ。

僕の日々(前書き)

私が最初に書いた「求める者。」のリメイク、書き直した物です。あまりに情けない文章で、つてのもあるんですが、進行上、変更した部分や、こう・・・色々・・・ねえ？(何が?)とありえず、大きなストーリーの流れに変更はありませんが、文章量は10倍くらいになってます。

時系列的に「親友からもう一步。」の続きになってまして、全9話です。

僕の日々

学校へ向かう川沿いの桜並木のピンクに、目にも鮮やかな緑が随分と混じり始めた。

高校の入学式から一週間が過ぎ、学校や教室の雰囲気にも少しは慣れてきた。

僕は元々新しい環境に飛び込んでいくのが得意じゃないし、目立つ事も、矢面に立つ事も好きじゃない。どちらかといえば内向的な性格だ。でも、変に目立つらしい僕は注目される事が多く・・・日々非常に迷惑している。

だから、高校に進んでからもまたその面倒な事が、また新たに繰り返されるのかと、念願の高校に進んだ喜びも幾分削られていたのだ・・・運良く、以前から仲の良い親友二人と同じクラスになり、随分と救われている。

・・・というのが今の現状だ。

僕は毎朝決まってある家のチャイムを押す。それが始まったのは確か小学校の1年生の時。幼稚園の頃からの付き合いの、そして何とか同じ学校に通う事が叶った、クラスメイトでもある安田航の家だ。今日も同じ時間に、変わらずこうしてチャイムを押す。

ありふれた呼び出し音が響くと同時に、家の中からバタバタと足音が聞こえて、勢いよく玄関が開き、長い髪をなびかせたとてもしきれいな人が出てくるのだ。

「おはよ聡太、今日も時間きっかりね。」

同じ学校の制服を揺らして、眩しい笑顔を見せる彼女は、航の2歳上の姉で・・・僕がずっと憧れ続けている人だ。

「おはよ葵姉、航まだ？」

航には悪いが、今ヤツは口実に過ぎない。

僕はもう何年も彼女と会うために、彼女と話すために、彼女の笑顔

を見るためだけに、この寄り道を続けている。

ずっと先を行き続ける彼女の後を追い続けても、その距離はまったく変わりはない。狭まりもせず、広がりもせず、でも時間だけは着実に流れ続けていく。

今年はやくまた、同じ学校に通う事ができる。

でもそれはまた、たった一年間だけの事で。

そして今度は今までと違い、この先はどうなってしまうのか・・・葵姉がどこに行ってしまうのか分からない。そんな不安を僕はずっと抱えている。

「色気付いて鏡の前で髪セットしてたから、まだかかるかも。」

「げ、置いて行こうかな・・・。」

弟の代わりに謝っているような顔する彼女に、少しこぼすと途端に笑顔に戻る。

うん、僕はこっちの顔をしてくれる方が嬉しい。

「それがいいかもね・・・あ、じゃあお先に。」

・・・今日はこれで終わりだ。

じゃあねと彼女に手を振って微笑むと、彼女も笑って手を振り返して、スカートを翻す。向きを変えた彼女の、段々と離れていくその後ろ姿を、角を曲がって見えなくなるまでずっと見つめ続ける・・・僕はきつと、この朝の時間のためだけに生きている。

葵姉の事は、航と知り合った時から知っている。

あまり積極的ではない僕は、幼稚園の頃もそうだった。

家に帰りたいと泣いていた僕に、あれこれちよっかいを出して、ガンガン話しかけてきた航といつの間にか仲良くなり。それが縁で姉である葵姉も遊んでくれるようになった。

でもその頃の・・・もう少し大きくなってからも葵姉は怖い存在で、遊びに行く度に目にする激しい兄弟喧嘩や、途中で仲裁に入る二人の母親にも・・・僕の家では見た事の無い光景をハラハラしながら見守っているしかなかった。

そして、葵姉は時々僕にも航同様の扱いをしてくれた・・・今思えばすべて笑い話だけど、当時は本当に怖かった。それが変わったのは、葵姉が中学に上がってからだ。私服から制服に変わり、短かった髪が伸び、恐怖の代名詞だった彼女の顔に、柔らかい笑みが浮かぶようになった。それと同時に乱暴な言動も減り、きつと一足先に大人に向かって歩き始めた・・・そういう事なのだろう。

そして彼女は僕にとって、親友の怖いお姉さんから、ずっと先を行く手の届かない憧れの人になった。

2歳の差・・・そのいつまで経っても埋まらない差が、僕にとっては大きな大きな隔たりとしてずっと存在し続けている。

「おう聡太、今日も早いな。」

「航は遅いよ。」

葵姉が先に行ってから10分以上が過ぎようとする頃、再び玄関の扉が開いてようやく親友が姿を現す。そして、悪気も謝罪も無い暢気な声に神経を逆撫でされるのもいつもの事だ。

何のために僕は朝早くに家を出ているのか疑問を感じ・・・いや、葵姉に会えるから、ちゃんと目的は達しているのだと納得する。

そして毎朝のように繰り返される、ここから学校までのジョギングが結構キツイのも・・・そういうもの事なのだ。

「二人ともおはよう、今日も朝からお疲れさん。」

教室に入ると、いつものように朋ちゃんいしかわともかが僕等を迎えてくれた。もう一人の親友で、名前は石川朋花。

中学の時転校してきた彼女に、航がとんでもない声のかけ方をしてくれた事が縁で仲良くなった。僕のせいで厄介な事に巻き込まれよ

うが、気も個性も強い彼女はそんな事など気にも留めず、今も相変わらず親友でいてくれる。

・・・いや、少し変わって、今は航の彼女という立場でもある。

「朋花もお疲れ、今日も朝練だったんだろ？」

「うん、やっぱり朝から走ると気持ちいいね。」

ごめん、僕はそれに賛同できない。

以前は朋ちゃんも一緒に登校していたのだが、高校に進んでからは陸上部に入り、毎朝のように朝練に出ている。本当に彼女には尊敬の念が堪えない。

「聡太くんも毎朝走らされてるんだから、そろそろ体力がついてもいい頃だと思っただけだな。」

「だよな、いくらひ弱でもなあ、もう随分走ってるのにな。」

・・・何その会話？ 二人の間に暗黙の了解の何かがあるような気がした。

「航？ ひよつとして、これ作為的にやってる？」

僕の言葉に朋ちゃんは平然としていたが、航は一瞬止まった。

「何の事だ？」

「細かい事は気にしない。」

へー、そういう事ですか・・・。

二人に嵌められていた事実にうんざりして何気なく外を見ると、2階の渡り廊下に葵姉の姿を見つけ、癒しを求めて窓辺に寄った。

何の教科か分からないけど教室移動なのだろう。隣を歩く美晴さんが僕に気付いて葵姉にも伝えてくれた。

そして、二人が僕に向かって手を振ってくれたので、僕も手を振り返した。

「聡太、青春真っ盛りだな。」

「本当だね、でも純情過ぎだよ。」

・・・頼むから、二人とも黙っててくれ。

僕の日々(後書き)

ではでは、続きもよろしくおねがいします。

私の日々(前書き)

2 話目です。

ではでは。

私の日々

聡太は偉いな・・・本当に航とは大違い。

うちの出来の悪い弟は聡太に迷惑かけっぱなしなのに、毎朝巻き添えをくらい遅刻ギリギリになりながらも見捨てないでいてくれる。

私ならもうとつくに見捨てて、確実に置いて行くもの。

本当に良い子なのよね。

「葵、どしたのさつきからニヤニヤして、気持ち悪いよ?」

急にかげられた声に意識が引き戻されると、朝のHRはいつの間にか終わっており、教室はガヤガヤとした空気に包まれていた。

毎朝の事を思い出しながら物思いに耽っていたらしく、HRで先生が何を言っていたかなんて、さっぱり聞いていなかったし・・・もう既にいらない。

人の事をニヤニヤと言ってくれた美晴も、ニヤニヤとした笑みを浮かべ私を覗き込んでいる・・・って、ニヤニヤ? え、私そんなにやけてた?

・・・うそ、あーっ恥ずかしいっ!!

「なんかいい事でもあった? 聡太くんにも告白されたか?」

慌てた私の様子に、さらにニヤニヤの度合いの増した美晴は、思いもかけない事を言い出してくれた。

「はあっ???」

・・・何で聡太の名前が出てくるの? 確かに聡太の事考えてたけど、告白って何の???

どうして私こんなに動揺してるの?

「まあいいや、ところで進路・・・」

「良くないっ!!」

揺れた心の中をそのままにしておきたくなくて、何気なく話を変えようとした美晴を思わず止めてしまった・・・しかも、大声で。

美晴も一瞬目を丸くしたし、注目を集めた事に今更ながらに恥ずか

しくなつたけれど、やっぱりこのままなのは、精神衛生上良くない。うん、そうよ。

「何で聡太の名前が出てくるの？」

「あれ？ 気付いてない？」

何故か美晴は満足そうに笑うと、からかうような調子で・・・その様子に私の頭の中はますます疑問符で埋まってい

こういう美晴の何でもお見通しして態度は、バカにされてるようで嫌なのだけれど、今の私は本当に何の事か分からないから、反論のしようが無い。

「・・・えーと、聡太に告られる事は、良い事なの？」

動揺により、脳の活動3割減くらいの状態で、必死に言葉を探したものの、適切なものが見つけれず、結局片言っぽくなってしまった。

「あーらあら、天然さん？ 葵、聡太くんの話してる時楽しそうじゃない」

私は、楽しそうにしてるのかな？

そんな事は意識していなかった。

でも考えてみれば、確かに聡太の事を考えるのは楽しいかもしれぬ。無意識で考えている事も多い。知らない人に告白されるのは面倒で嫌だけど・・・もしそれが聡太だったら？

「その様子じゃ当然知らないだろうけど、彼の株上がってるよ」

「へ？」

「入試の成績かなり良かったらしいし、見た目も可愛らしいしさ、冷めてるっつーか

ちよつと大人びた雰囲気あるじゃん？ それで同級から年上まで、満遍なく狙ってる子

いるらしいよ」

「・・・誰が？ 聡太が??？」

何それ?・・・っていうか何でまたこんなに動揺してるの、私？

「幼馴染って安心していると、誰かに持ってかれちゃうよ」

安心？・・・私は何に安心してるの？ 聡太が告白？・・・そんな事は考えてなかった。でも、逆に聡太が誰かに告白されて・・・もしもそれを受けちゃったら？

・・・どうして私は困るって思ってるの？ 何で私はそれが嫌なの？ 黙り込んだ私の様子に、美晴は再び満足そうな顔をした。

「で、本題なんだけどさ、進路どうすんの？」

何かそういつていた気がするけど、自分の思考の中に入ってしまった私にはさっぱり届かず、授業に来た先生の声がかかるまで、ぐるぐると考え続けた。

この所美晴は、以前にも増して早く帰るようになった。

毎日毎日何の用事があるのか知らないけど、放課後が近くなるとソワソワしている。そして、終わると同時に荷物をまとめて「じゃあね。」って一方的に言って、あつという間に教室から出て行く。

変なの・・・こないだ様子が変わったのは何だったのかしら？

その少し前から早く帰ってたけど、あれからもっと・・・そうね、

何かすごく嬉しそう？ 何かやたらとテンションが高いのよね・・・人に難題を吹っかけておいて、相談に乗ってくれる気も、ヒントをくれる気も無いって事よね？

そういう友達はきつと貴重なのだと思う・・・けど、厳しいよ？ 相変わらず。

美晴はとつても自分に厳しく、周囲には結構優しい。やり方に問題がある事が多く理解されにくい部分もあるけど、最後には『なるほど』と思わせる結果になる。

でも、それに気付くまではかなり厳しい・・・よく考えるとばかりに難題を出され、分からないまま考えさせられる。

今の私の状態だ。

・・・うん、今はお手上げ。考えるの疲れちゃった。

気分転換に吹奏楽部に遊びに行こうと、カバンを持って音楽室へ向かって歩き出した。

今年はクラスが分かれちゃったけど、とても仲の良い友達の志帆ちゃんが所属している。休憩時間も会ったり会えなかったりだから、こういう時に遊びに行く。

そして、その縁で友達も増えた。

志帆ちゃんの担当楽器はフルートで、顧問の松浪先生が来るまでの間に、それを吹かせてもらったり、話をしたりしている。

美晴に置いて帰られた日はだいたい音楽室に顔を出してるから・・・って、この所本当に行きっぱなしよね。

「志帆ちゃん、また来たよ。」

「いらっしやい、待ってたよー。今日もお菓子あるよ。」

そう笑う志帆ちゃんは、ちっちゃくてかわいい。150cmくらいで、つい頭を撫でたくなる・・・けど、やると怒られるからやらない。

フルートだけでなく、他の楽器も結構肺活量を使うらしくて、部活の前にこうしてエネルギー補給と称してお菓子パーティーの状態になっている。そこに何となく参加する。

「私も持って来たよ。」

いつももらってばかりじゃ悪いから、カバンを探ってエアインのチョコの箱を出した。

「あ、これ好き。」

「口の中であつという間に無くなっちゃうんだよねー。」

わいわい騒ぐ声に混じり、問題を棚上げにして楽しむ。友達とふざけあつて、これが結構至福の時間。

けど、不意に誰かの声がして、そんな気分は一掃されてしまった。

「あ、為井くん。」

今年入部の1年生を中心に空気がざわついて、多くの女の子達が窓辺に寄った。

集まる人に混じって私も校庭を見ると、確かに聡太の背中が見えた。正確に言つと航と、彼女の朋ちゃんもいるけど。

帰宅部の二人はともかく、陸上部のはずの朋ちゃんまでもう帰るらしく、いつもの三人が揃って校門の方へ向かつて歩いていく。

それにしても、この急に沸き立った空気には正直驚いた。

・・・美晴が言つてた事は本当だったんだ。

棚上げ。そうだ、今はただの気分転換。

今はちゃんと考えないといけないらしい。

安心？

・・・そうだ。聡太はずつと側にいるものだと思つていた。けど、それは私が勝手に思い込んでいただけで、それは何の保障も無い。つて、え？ それつて・・・

「安田、練習は始めるから、部外者は出てけ。」

丸めた楽譜で、ポンと頭を小突かれた。

考え事を邪魔された事を恨みに思つて、ゆっくり首を巡らせ無然とした表情で顧問の先生を睨んでやった。

「お前、毎日のようにここ遊びに来るんなら、もう入部して関係者になればいいんじゃないか？」

しかし、先生は動じる事無くもう何度も聞いた事のある台詞を口にする。

「それとこれとは別なんです。」

先生に背を向け、そっぴい捨てながら自分の荷物を手に取り、友人達に笑顔を向けた。

「じゃ、また明日ね。」

そしてそのまま音楽室を後にした。

吹奏楽部は毎年、野球部の県大会予選の応援に借り出される。今年

度も、既に曲を決め練習を始めていた。

一人階段を下りながら、

「暑いのはご免なんですよ。」

と、ぼそつと呟いた。

放課後の校舎は、遠くから聞こえる部活に励む人達の声と、自分の足音くらいしか聞こえない。

特に目標も無く、ただ日々を過ごしている私には、一生懸命な人達が眩しく感じる。なぜそんなに打ち込めるのか分からず、それでいて少し羨ましい。

そのうち、音楽室からそれぞれにチューニングをする雑多な音が響き始め、すぐ側の私の足音すらかき消されてしまった。

図書室に行く事も考えたけれど、別に用事も無いなと思い直し、正面玄関に向かう事にした。重たい事ばかり考えているせいかな、なんだか気分は晴れない。

まだ外を歩いていた方が、少しは気分が晴れるかなって。

そんな事を考えながら下駄箱の自分の靴の前に立つと、その靴の下に何かがあるのを見つけた。ちょうど靴で隠れてしまいそうな大きさの白い封筒が下敷きになっている。

「何だろ？」

少し砂でざらつく封筒を、興味半分・面倒だなと思う気持ち半分で開けてみると、微妙にいびつに折りたたまれた便箋が1枚入っていた。

でも・・・えーと、これは読めないな。

ミミズがのたくったようなとは、こういう字を指すのだろう。

小学生でも、もったきれいな字が書けるんじゃないかってほど酷い文字のようなものが、羅列されていた。

しかし、何が書いてあるのか分からない物はどうにもできない。

テストや提出物の時、先生はどうしてるんだらう？

他人事ながら先生達に同情しつつ、とりあえず持って帰って解読し

てみる事にした。

見えない不安（前書き）

3 話目です。

ではでは。

見えない不安

ノートを広げて机に向かっていたら、急に妹の騒ぐ声が出た。

妹の部屋は僕の部屋の隣にあり、壁越しだが結構響く・・・理佐何が嬉しいんだ？

やたらと甲高い嬌声に続き「美晴さん大好きー」って言うてるのはつきり聞こえる。

・・・って美晴さん？

その名前を聞くと嫌な想像しかできない。でも、きつとそんな想像は軽く裏切られる。僕の想像を遥に凌ぐ何かを、おそらく妹と一緒にやって画策してるんじゃないだろうか？

もちろんその畏にかけられるのは僕だ。

・・・僕は一体何をされるんだ？

気を付けようにも、どこからその畏が始まるのかわからない事には防ぎようもない。もちろん、聞いた所で教えてくれる訳も無く、逆に妹の機嫌を損ねるだけだ。

何かヒントになる事が聞こえないかと耳を澄ませてみるも、それ以降妹の声が聞こえる事は無く、僕は不安な気持ちを抱えたまま、やたらと機嫌の良い妹と一緒に夕飯を食べる事になった。

「ねーちゃん、何難しい顔してんだ？」

夜にリビングのソファで謎の怪文書とにらめっこをしていると、風呂上りの航が麦茶片手に声をかけてきた。

私疑問に思われるほど、不審な事してたかな？

「これ。」

まったく読めない手紙らしきものを航に渡し、ソファに沈み込んだ。完全にお手上げである。断片的に読める平仮名はあるが、ひん曲がった漢字は『字』と認めたくない。

滅びた文明の文字の解読も、こんな苦勞だったんだろな。

脳のが疲れてきたせいか、考えている事が少々ひどいと自分でも思うけど、止めない。止めたくない。これはきつと新手的嫌がらせよね、きつとそうだ、そうに違いない。

私に無駄な時間を使わせるのが目的で・・・でも一体誰が？

一番やりそうな美晴はもつと不思議な手段を講じてくる。こんな幼稚な手は使わない・・・でも、それじゃあ誰が？

「どうすんのこれ？ 西山隆志って3年だったよな？」

しばらく紙切れを眺めていた航が、知らない誰かの名前を口にした。「はあ???」

西山って誰よ? ...ってそこに書いてあるのか...って事は、ただのイタズラな怪文って訳じゃないのね...って、え？

「あんた、これ読めるの？」

「確かに汚い字だけど、・・・ねーちゃんは読めないのか？」

不思議なものを見るように問うと、不思議なものを見るように返された。

「まったく、全然！ 古代文字の解読ってくらい？」

「・・・ひでえ。」

反論の余地が無いほどきつぱり言い切ると。小さくそう呟くのが聞こえた。いくら批判されても、読めないものは読めない。

航はそんな私の様子に盛大にため息をつくと、諦めたように読み上げはじめた。

+
-
+

安田 葵様

明日の放課後、2号棟の裏で待っています。

来るまで待っています。

+
- - - - -
- - - - -
+

「・・・だつてさ。」

「へー。あんたそれ特技よ特技、何でそんな字読めるのよ？」

思わず感心してしまった私に、航は眉を寄せてあきれた表情を作った。

「それはもういいから、どうするかを考えてやれよ。」

「えーっと、西山つて誰だっけ？」

同じ3年らしいけど私は知らない。航は1年のくせにどうして知ってるんだろう？

航を見上げてみたけど、向こうは目を合わせもせず残っていた麦茶を一気に飲み干し、グラスを流しに置いた。

そのまま自室に戻ろうとするのを、私は慌てて呼び止めた。

「航！・・・今日美晴が言ってたんだけど・・・聡太つて、モテンの？」

「はあ？ 突然何だよ？」

「いーから、質問に答える。」

そりゃ、突然だけど・・・気になるんだから仕方ないじゃない。

素っ頓狂な声を上げる弟をいつもの調子で押さえつけると、向こうもいつものように慥然としながら口を割る。

「あーんと、小5くらいからキヤーキヤー騒がれるようになったかな？ そのくらいから成績もトップになりだして、俺みたく、バカな事しなくなつて・・・少し雰囲気変わったんだよな・・・まあ聡太は聡太だけどさ。もちろん今も大人気だぞ、本当腹が立つほど。」

多少、何か含む所のある言い方をする弟はさておき、その弟から語られた内容に、今日音楽室で見た光景を重ねた。

急に沸き立った女の子達に驚いて、何故か嫌な気がした。

これまでどこか、もう一人の弟のような気だった聡太。その彼とい

う存在と、その周りの変化に、今私は正直驚き、戸惑い、寂しく感じている。

毎朝会う聡太はずっと変わらない。

だから私は・・・ずっとそのままだと思っていた。

毎朝毎朝変わらない、学校に行く仕度を済ませた頃に玄関のチャイムが鳴る。

弾む心をおさえて急いで靴を履き、いつものように玄関から出た。

しかし、そこに思う姿は無く・・・ただただ白だけの世界が広がっていた。

・・・これは恐怖？

急に目が覚めて、耳まで伝う温かいものに驚き、それでも夢でよかったと安堵した。

この心の動揺は、見えない未来に対する不安・・・きっとそんな恐怖。だから真っ白で何も無かったんだ。

私は進路に迷っている。進路希望の紙にもまともな事を書けないでいる。特になりたい職業もないし、行きたい学校がある訳じゃない。それに私は、今の状況にとても満足している。朝チャイムに呼ばれ玄関のドアを開けると、いつも笑顔の聡太がいる。それだけでよかった。

でもきつとこの先はこうはいかない。

もし私が適当に大学を選んで、ちゃんと進めたとして・・・でも、そこには彼がない。

ううん、まだ聡太は毎朝航を迎えに来る。

家から通えるようなところを選べば・・・でも2年後には？

彼はどこに行くのだろう？

もし遠くに行ってしまうば・・・もしそうなれば、私と聡太の縁は切れてしまう。

・・・そんなの嫌だ。

再び涙が込み上げてきて・・・そこまで考えて、私は初めて気付いた。

・・・そっか、私は聡太の事が好きだったんだ。

まだ暗い部屋の中でいくら布団を被り直しても、高ぶった感情に再び眠る事はできず、カーテンの向こうが段々と明るくなっていくのを、ぼんやりと眺める事になった。

不安から不満へ(前書き)

4話目です。

ではどうぞ。

不安から不満へ

いつものように航の家のチャイムを鳴らすも、いつもの足音がしない。そう不思議に思っていると、いつもより早く航が出てきた。

・・・以外だ。

「毎朝、ご苦労さん。」

「偉そうに・・・そう思ってたんなら、毎朝待たせんな。」

しかし、僕の抗議に航は相変わらず悪びれた様子も無く笑う。

「っーか、笑い過ぎ。」

その笑いはどこか違うものに繋がったのか、おかしなツボにでも嵌ったのか、とにかく笑い過ぎだ。今の話だけでここまで笑うとは思えない。

「いや、途中からねーちゃんの事思い出してさ。」

「はあ？ そういえば葵姉は？」

やはり別の事で思い出し笑いをしていたらしく、しかも、僕の聞きたい事に上手く話が流れてくれた。

「ああ？ 今日はよく分かんねーけど、早く出てっただぞ。」

「そっか。」

日直とか用事があるとか、そんな所かなと僕が納得しかけていると、それがさ・・・と、航は昨夜の出来事を話し始めた。

「放課後に2号棟裏？・・・ベタだな。」

内心の動揺を隠して、二番目に考えた事を口にした。

「お前もよく呼ばれてんだろ？ 為井くん、好きです!!」

「気持ち悪い。」

「っらやましいよな」

あまりに無邪気な表情と、その能天気な物言いに無性に腹が立った。ただでさえ、当てが外れガツカリしているというのに、無神経にも程がある。真摯な思いを断る行為のどこが楽しい？ あんなに大変

で後味の悪いものは無い。

でも、僕には彼女達の気持ち分かるから、その分できるだけきちんと対応したいと思っっている。

しかし、だからこそ僕は、その気持ちに応える事はできない。

そう伝える度に心の中に罪悪感が溜まっていき、激しく何かが消耗していく。それでも、僕の中にあるのは葵姉だけだ。

「じゃあ、朋ちゃんにその事を伝えておくよ。」

「はあっ？ 何で？」

「誰かに告白されたいんだろ？」

「まてまて、波風立てるような事すんな。」

慌てふためく航の様子に、少しだけ気持ちが晴れる。

でも朋ちゃんなら、そんなに動じる事はないかもしれない。「じゃあ私がもう1回。」とか言い出して、前回とは趣向の違うサプライズな告白を企てるかもしれない。

それほど二人は仲が良く・・・そして、実直で熱い。

周りの目を気にしない二人はとてもお似合いで、とても迷惑だ。

・・・まったく航は愛されてる。

と、そんな事を考えたが、今の僕は教えてやるような優しい気分では無いので、焦った航をそのままにして、少し早足で歩き出した。

聡太が好きだという事に気付いて、出掛けにどんな顔して会えばいいのか分からず、結局いつもより早く家を出て、会わない事を選んだ。

なのに、毎朝の糧だった日課が抜けると、何かとても物足りない気分がする。

おまけに寝不足で、さらにもうひとつ面倒な事まである。

今日何度目かの溜息を吐こうとして、それより先に聞こえた隣からの溜息に、その吐いた本人を見やった。

「あれ？ 美晴も溜息？」

「も？」

美晴と二人で川土手を歩き学校へ向かう。幾分緑の増えたピンクの木の横を、落ちた花弁はなびらを蹴散らしながら、ただ黙々と歩いていく。でも、自分の考えに沈みこんでて、今までその事にも気付いてなかった。

「葵は何考えてたの？」

美晴が少し笑みを作って聞いてきた。また何か少し無理してるみたいだな。

私は少し考えた後、例の封筒を取り出した。

聡太の事はまだ言いたくない。

美晴から見れば、きつとそんなのとつくにバレバレで・・・今思えば、なるほどと思う言動ばかりだったから、だから「やっと気付いたか」って笑われるのは悔しい。それに、まだ私の中で気持ちの整理がついていない。

「またラブレター？」

「またって言わないで。」

確かに時々こういうのもらうけど、嬉しいと思った事は一度も無い。

「見せて、見せて。」

美晴は私から封筒を奪い取ると、何の遠慮も無く便箋を出して広げ、すぐに驚きの声を上げた。

「うわ、酷い字。」

美晴も同感のようで、苦笑いを浮かべている。

「でしょ？ 絶対これ読めないと思わない？」

それに気をよくして、私は美晴に同意を求めた。こんな字が読める航の方がおかしい。

「んー、ギリギリ読めるかな？」

「うそっ！？ 美晴も読めるの？ 何で？ 美晴も航も変。」

昨夜、私が読めないと言ったら呆れてくれた弟の鼻を明かしてやりたかったのに・・・。

「で、行くの？」

行きたくない。

今の私はそれ所じゃないし、おまけにこんな字を書く人には会いたくない。解読に要した時間の無駄に加えて、さらに時間を無駄にするような事なんかしたくもない。

「じゃあ、きつぱり振ってきたら？ 文句の一つや二つ交えてさ。」
けれど、おかしなイタズラを思いついた時のような顔で語られた提案は、とても魅力的で・・・丁寧に断りするのは、とてもじゃないけどやりたくない。

けど、私の中の不満をぶつけるのは真つ当な事だと思われた。

だって、私の貴重な時間を潰してくれたのだから、そのくらいは当然の報いよね。

「そっか、いいねそれ。」

晴れ晴れした気分で同意すると、美晴はとてもおかしそうに笑い出した。

「おはよう。今日は早いね。」

挨拶をしながら近付いてきた朋ちゃんは、航の横に来るなりその脇を突付いた。

突付かれた航は妙な声を上げて仰け反る。航はくすぐられるのに弱い。朝っぱらからその弱点を突いてくるとは・・・やはり朋ちゃんは容赦がない。

しかし、それでも航は怒るなんて事は無く、喜んでるよな、それ？

「そうだ、夕べ面白い事があつたんだよ。」

「何々？」

「ねーちゃんがきつたねー字の手紙持ってたさ・・・」

僕が少し前に聞いた話を、今度は朋ちゃんに披露し始めた航に少し苛ついた。僕にとっては面白くなく、何度も聞きたい話ではない。

耳を塞ぐ代わりに自分の席に向かい、イスを引き出すと思いの外大きな音を立てた。

「聡太機嫌悪いなー、んな手紙くらいで目くじら立てんなよ。」
機嫌が悪い自覚はある。しかし僕にとってその手紙は、くらいで片
付く物ではない。

「別に、ねーちゃんが誰から手紙貰ったっていいじゃねーか、どう
せ・・・」

「いい訳ないだろ！？・・・航はそんなに僕を怒らせたいの？
それともわざわざからかうために、もう一度その話を聞かせるつも
りか？」

「んな訳ねーだろ？」

そう、航がそんな事を考えるはずが無い。けど、僕は止まらなかった。

「航だつて、人の事笑えるような字じゃないだろ？　まだその話が
したいなら、マシな字が書けるようになってからにしたらどうだ？」
もちろん言つてすぐに後悔した。

航は怒るでもなく苦笑いで、朋ちゃんは笑つてて・・・

「・・・悪い、言い過ぎた。」

「別にいいよ、本音が聞けたし。」

そう答えたのは朋ちゃん、先に言われて困った航は、仕方無さそ
うに首を縦に振った。

I t W a s s u r p r i s e d . (前書き)

5 話目です。

じげんじげん。

It was surprised .

昼休みに売店で買ったサンドイッチと成分調整の豆乳、そして読みかけの本を持って屋上に上がった。

少し裏にまわった所が僕の指定席だ。程よく日陰で程よく風が吹き抜ける場所で、何より人が少ないのが気に入っている。夏に本格的に暑くなるまでは、きつと重宝する場所になるだろう。

この所、一人でいるとホツとする。

しかも今日は特にだ。・・・航に当たるなんてどうかしている。

中学の時は何だかんだで三人一緒にいたが、ずっと二人に挟まれているのはやっぱり居心地が悪くて、高校に入ってから時々こうして一人離れる事が増えた。

僕の遠慮を二人がどう思ってるかは知らないけど、これを事前に予言した人物がどう思っているかは想像がつく。

まだ僕は、何も自分では切り開いていない。いつか美晴さんが言った通り一人離れて・・・やっと最近それを考え始めた。

でも今日の僕の心の中は、違う事で占められている。

葵姉に告白の呼び出して、考えてみればおかしな事じゃない。美晴さんは僕だけじゃなく葵姉の写真も売り物にしていた。その時点で葵姉の人気の度合いが知れるというものだ。あの人が売れないものを売ろうなんて考える訳がない。

今日の放課後か・・・航の話だと、今回の相手に対して、腹を立てていたようだから、安心といえは安心なのだが、気にならない訳ではない。

そして、これからもどうなるか分からない。

もし、葵姉が誰かからの告白を受けてしまったら？

・・・そんな事、考えたくも無い。

その時よく知ってる声が、すぐ側から聞こえた。

「あー、いたいた。聡太くん発見！」

それまでの苛立つ物思いが挫けてしまっほどの、嬉しそうな声を耳にして僕は少し気が抜けた。そして声に負けない笑顔を浮かべた朋ちゃんが、当然のように僕の前に座った。

「あれ？ 朋ちゃん一人？」

「そつ、用事があるからつて航は撒いて来たの。」

撒く？・・・やっぱり航は振り回されてるな。部活の事以外ではいつもセットのような気がする二人でも、色々とあるんだろうか？そんな余計な事を考えそうになったが、彼女の顔を見てると違う事が分かった。航抜きで僕に何か言いたい事があるのだろう。

彼女を見てる分には楽しい。でも、これから何を言いだすのかと思うと、多少の覚悟がいる。しかも、今は止めてくれる航も居ない。そうか、そう考えるとやっぱり、航はすごいやつなんだな。

僕は少し心の準備をして、改めて朋ちゃんに向き合う事にした。

「で、用事つて僕に？」

「当然。」

問うと満足げににんまりと笑い、そして唐突に質問される。

「聡太くんさあ、何が不満なの？」

不満？ どれだ？ 不満は色々ありすぎてどれを指しているのかよく分からない。

「だって、今日は朝からいつもに増して意地悪じゃん？」

「意地悪？」

「そつ、航に対する突込みが情け容赦無い。」

それ朋ちゃんには言われたくない。

「その抗議は的外れだね。八つ当たりはしたけど・・・航が泣きでました？」

「まさか。航は打たれ強いから、もつと酷くても全然平気だよ。」

それ話の軸がずれてる。今、意地悪と言ったくせにもつと酷くて平気つて・・・到底彼女の台詞とは思えないけど、それが朋ちゃん

だ。

「やっぱり恋の悩みだよな？」

まるでオモチャでも見つけたように、目を輝かせて身を乗り出す彼女に、僕は覚悟が足りない事を知った。

「な、何を根拠にそんな話になるんだ？」

思いつきり動揺し、激しく居心地の悪さを感じて視線を逸らすと、畏に引つ掛かった事を知らされた。

「あ、やっぱり凶星？」

そっか、カマをかけられたのか・・・。

朋ちゃんはこちらの事を構う事無く、言葉を続ける。

「だって、勉強なんかじゃ悩む事なさそうだし、教室でも一線画し
るところはあるけど、それなりだし。」
ねえ、それなりって何？

「まー朝の態度はそのままだけどね。あ、そだ、知らないだろうけど、最初は私も聡太くん狙ってたんだよ。」

「はっ？」

「でもさ、ずっと遠く見てるって言うか、ずっと誰かを見てるよね？ だから

いくら頑張っても無駄だなんて思ってさ、3日くらいで止めちゃった。」

そう軽く言うっておかしそうに笑っている。驚かされたはしたが、この余裕の笑いは何の拘りこたわもない完全に過去のもので・・・僕は何も言わない方がいいんだろうな。

それにしても、僕の気持ちを知っているのに、今更わざわざ『誰か』
という言い方をしてくる所が嫌らしい。

朝止めてしまった話は、結局朋ちゃんにも伝わっていて、だからこ
うやって僕をつつきに来たって事だな・・・迷惑な。

「・・・って航は？」

「いいの、面白いから航は別格。・・・とにかく、悩むな少年。」

あえて航の名を出しても動じる事無く、背中をバンバン叩いてくる。

・・・それ結構痛い。

「同年だろ？」

「いーの、いーの。」

そして、突然ふざけた態度から一転し、真面目な顔で正面から見据えられた。

「うじうじしてないで、いい加減動こうね。」

気迫に負けた・・・気がする。

しかしそれも一瞬の事で、再びニコリと笑う。

「駄目でも大丈夫。聡太くん目当ての子は、いっぱいいるんだから。」

「

「・・・って、そのどこが大丈夫？ それ人としてどうかと思うんだけど？」

「さあ？ まあ大丈夫だよ。・・・さてと、言いたい事は行ったから、私もう戻るね。」

ひとしきり笑った朋ちゃんは、立ち上がると身を翻し、あつという間に姿を消した。

結局、サプライズの告白を受けたのは僕で。朋ちゃんにまで背中を押された。

・・・言いたい事が、

何をすべきなのかはずっと前から分かっているけど、今僕には、その勇気や覚悟が無い。

そう自信満々に言える僕の、あまりの不甲斐無さに、溜息しか出てこなかった。

放課後になると、自然に2号棟の裏に足が向いた。朋ちゃんの言葉に背中を押された・・・のかどうかは分からないけど、やっぱり気になって仕方がない。

そこにはもう葵姉が居て・・・腕組みで仁王立ち？

これは本当に怒ってるな。後ろ向きで背中しか見えませんが、そこには何か恐ろしいものが漂っているような気がした。

伊達に長い付き合いではない。葵姉の機嫌くらい一目見れば分かる程なく二人の男子生徒が近づいてきて、僕は思わず吹き出した。

おいおい、付き添い有りってどこの女子だ？

そのうちの一人が前に押し出され、何かを言い始めたが、葵姉は右手で額を押さえて話を途中で止めた。

今度は男を指差し、何かを一方的にまくし立てている。

断片的に「・・・考古学者なんかじゃないから・・・」って言葉が聞こえた。遠過ぎて殆ど何言を言っているのか分からないけど、本当に何の話だ？

考古学者ってどういう事だ？ あの人は告白しに来たんじゃないのか？

そのうち耐えられなくなった男はその場を逃げ出し、付き添いの男もその後を追って姿を消した。

まあ、ああいう時の葵姉は止まらない。そんな部分を知らない相手なら相当驚くだろうし、あのきつい言葉に耐えられはしないだろう。弟の航は当然対処法を心得ているし、僕はあそこまで怒らせるような事はしない。

久しぶりに見た葵姉の怒る姿に、心配してたのが馬鹿らしくなって思わず吹き出した。

本当、一体何を言っただんだ葵姉？

「安心したかい、聡太くん？」

急に背後から聞きたくもない声が出て、驚いて振り向くと、やっぱり美晴さんが立っていた。

「み、美晴さん！？ いつの間に現れたんですか？」

「私は神出鬼没が信条なの。」

背後の声の主はこちらを見る事無く不気味な事を言う・・・さすが悪魔だ。

そしてそのまま前を向いたままで言葉を続ける。

「面白い物が見れて、満足満足。だがしかし、言い過ぎかな・・・
鬼と呼ばれても仕方ないな。」

・・・本当に、一体何言っただんだ葵姉は・・・ん？ 言い過ぎ？

「って、何言っただか聞こえたんですか？」

美晴さんは、興味を覚えた顔でようやくこちらを向いた。

僕には聞こえなかったものが、どうして聞こえてたのか分からないけど、この人なら何だっただけ可能な気がする。

「知りたい？」

「はいっ。」

恩を売られるのは恐ろしい気がするけど、それ以上に葵姉の言葉が
気になり、間髪入れずに答えたのだが、

「結果も良かったんだけどね・・・もったいないから、秘密。」

見事にはぐらかされる。本当にこの人は分からない！

「もったいないって何ですか？」

訳の分からない態度に苛々しながら反論すると、目に笑みを浮かべ
て優しく言い含めるように意味不明な事を口にした。

「パズルのピースは、他のじゃ駄目なんだよ、決まった形でないと
嵌まらないんだよ。」

それ、ひよっとして、また・・・腹の立つ新しい課題の追加ってや
つですか？

再確認（前書き）

6 話目です。

じやまじやま。

再確認

家に帰ると、カバンを投げ出し制服のまま机に向かった。そして、ルーズリーフを一枚出して、美晴さんの言っていた事をそこに書いた。

『パズルのピースは他のじゃ駄目。決まった形でないと嵌まらない。』
当たり前の事だ。

いくら似たような形を持って来た所で、そこに嵌る事はない。もし万が一嵌ってしまったとしても、その絵はずれていて完成してもおかしい物になるはずだ。確実に2箇所絵が違うのだから。

・・・美晴さんは何が言いたいんだ？

やっぱりあの人の言う事は遠大過ぎて分からない。いつも最後までいかない、その理解には及ばない。まったくどんな捻くれた脳の構造をしてるんだか・・・

書いた文字の下の段に線を引いて区切った。

とりあえず今は、よく分からない美晴さんの言葉は置いておく。

線からずつと下の真ん中の辺りに『葵』と書いて丸で囲み、いくつかの矢印を、その『葵』の文字へ向けて引いた。

これは葵姉に向けられた不特定多数の好意。

そのうちの一本だけを太く書き、この矢印は僕を表す。つまり、所詮僕の思いもこの不特定多数の中の一つに過ぎないと・・・視覚的に再確認した。

再び『葵』の文字をグルグルと丸で囲み、ぼんやりと考えた。

ここからの線は一体どこへ向かうのだろうか？

自分を表す矢印に向けて矢印を引っ張り・・・こうなればいいんだけどな。

と考えると同時に、随分と女々しい事をしている自分に恥ずかしくなり、ルーズリーフをくしゃくしゃに丸めてゴミ箱に放り込んだ。

急に背中に何かが乗ってきた。こんな事をしてくる人物に思い当たるのは一人しかおらず、続いてその人物の声がした。

「葵ちゃん、さすがにあれは酷すぎない？」

・・・何の事？

振り返ってみても美晴は笑ってるだけだった。

「西山くん、泣いてたよ。一緒に来た友人に慰められてる姿は、哀れだったよ、いや無様？」

「ちよつと、また見てたの？」

この好奇心の塊の前ではプライバシーなど存在しない。今回は別に、そこを咎めようなんて気は無いけど・・・やっぱりいい気はしない。

「あまりのシヨックで、受験に失敗しかねないかもね。」

「ち、ちよつと美晴？」

確かに今思えば・・・あの逃げ出した様子を思えば、少し言い過ぎたような気もしなくは無いけど、人生を左右する問題にまで影響するとは思いたくない。

つて、文句言えばって提案したの美晴じゃない、そんな人事のように笑わないでよ。

しかし美晴は、人に罪悪感を植えつけるだけ植えておきながら、急に話題を切り替えてしまった。しかも、とつても大きな問題に。

「あ、そうだ。今回は聡太くんもいたんだよ？」

「何で？」

名前が出ただけでドキツとして、続いて疑問で埋まる。

・・・聡太がどうして？

「さあ？」

含み笑いで見つめられる中。私の頭の中では、都合のいい解釈が展開された。

おそらく弟が手紙の事を話したのだろう。そして、それを気にして聡太がその現場を覗きに来た。つまり、聡太は・・・私の事を気に

している？

いや、でもそんな確証はないし、私がそうだったらいいなって思うだけだから・・・本当の所はよく分からない。

私が考え込んで黙っていると、美晴はふいにつまらなそうな顔でこぼした。

「あゝ、何だ本当に分からないのか・・・。」
ドキツとした。

美晴の態度はひよつとして・・・私が期待した答えは、正解なのか・・・？

「本格的に受験始まるまでに片付けなよ？　じゃないと、失敗するのは葵かもよ？」

「・・・縁起でもない事、言わないでよ。」

「ほう、そう言うからには、進路は決めたのかい？」

「・・・決めてない。」

淡い期待から急に現実に引き戻され、恥ずかしくなつて美晴から目を背けた。

私は一体何がしたいんだろう？

今までは何となく来てしまった。小中は公立で、高校は近いからつてだけだし、その間にもこれと言ってやりたい事や、特に打ち込んだ事も無かった。

私、何か本気になつてした事なんかあつたかな・・・？　とりあえず、特に苦勞しなくてもある程度の事はできた。

だから、いつも遊びに行く吹奏楽部だって、何度誘われても乗り気にはなれなかった。

享樂的に生きてた訳じゃない・・・と思う。けど、現状には結構満足してた。

もちろん不満とかはいっぱいある。でも、やっぱり今は楽しいと思う。

だけど、それは未来を見て・・・先の事を考えている訳じゃなくて、ただ今を生きているだけだ。

・・・向き合う時が来たって事よね。

未来のための自分と、そして聡太の事も。

この間見た、真っ白な夢・・・

あれはやっぱり、私の漠然とした不安？

先の事を考えていない、私の描けない未来？

そして、聡太のいない未来。

そんな事を考えながらぼんやり歩いていた私は、そこにある段差に気がつかなかつた。3年目のよく知った学校なんだから、もちろん知らないはずがない。

でも私は見事に踏み外し・・・驚き過ぎて悲鳴は上がらなかつた。しっかりと尻餅をついた後、あまりの情けなさに自嘲の笑いが込み上げてきた。

「・・・どこの間抜けよ、私は。」

「葵姉、大丈夫？」

忍び笑いの向こうから、今まで考えていた聡太の声がして、転んだ時よりももつと驚いた。座り込んだまま振り返ると、すぐ真後ろに右手を出した不自然な体勢で聡太が固まっただけで、心底すまなそうに顔を歪めた。

「・・・ごめん、ちょっと間に合わなかつた。」

うわっ、見られた・・・これは相当恥ずかしい。

穴があつたら入りたいて、これ今の状況よね？

顔どころか頭まで熱くなって・・・って？ 私は疑問を覚えて一気に冷めた。

「ねえ、何がごめんなの？」

ただ私の不注意で、一人で転んだだけだ。謝られる理由が無い。

「んー、運が良ければ助けられたかなって。」

体勢を戻して頭を掻いてる聡太は、思ってた以上に男の子で・・・ドキツとした。

「運？」

「そんな感じでいいんじゃないの？ 目の前で知ってる人がこけそうだったら思わず動いちゃうものだよな？」

「うーん、それはそうだけど・・・」

「それは、ごめんの答えになっていないような気がするけど？」

「今回は運が悪くて助けられませんでした。って事のごめんかな？ 運が悪くてって、それどっちの運なんだろう？」

「ところで足大丈夫？ 立てる？」

聡太にの差し出した手にドギマギしながら捕まり、立とうとしたけど結構痛くて再び座り込んだ。

「痛い？ 捻挫かな？」

すぐ側で聡太の気遣わしげな声を聞き、とてもすぐつたい気分になる。

小さい時から知っている弟の友達。

ずっと弟と仲が良いから、もう一人の弟ってくらいの存在だったのに・・・でも、私の中でそれが違うものに変化している事に気付いて・・・。

そうだよな、今がずっと続く訳じゃない。時間はどんどん流れていくんだ。

だから聡太はいつの間にかこんなに大きくなって、今の私をとても心配してくれている。それが何だかとても嬉しかった。

「とりあえず、保健室行こうか？」

聡太が前にしゃがんで、再び顔が熱くなった。

・・・それおんぶするって事よね？

学校でつてどこも恥ずかしいけど、聡太にっるのが恥ずかしい。

「おんぶ？ それ恥ずかしくない？」

「でも、歩けないんでしょう？」

「・・・うん。」

念を押されて、返事をするしかなかった。

抵抗した所でここから動ける訳じゃないし、無理に動いて痛い思いをするのは嫌だし、聡太の申し出を断って、他の人におんぶされるのも嫌な事に気付いた。

そっか、これが最良の策なのね。

「お姫様だっこするには僕の腕力足りないから、おんぶで我慢して。」

何故そんな事を言い出したのか分からないけど、その聡太の言葉に思わず吹き出した。

「正直ね。」

「そりゃ15歳の小僧だよ？ 鍛えてる訳でもないし、でも無理して落つことすほどガキでもないし、まあ分相応ってやつ？」

なんか、冷静な判断してるのね。

いつまでもバカな弟との差を感じて、まじまじと見つめてしまった。きつと航なら無理して落つことす。

「ほら、痛いんでしょう？ 早く保健室行こうよ。」

「・・・あ、うん。」

保健室までおんぶされて・・・ううん、ここで会って、話をして、思ってた以上に大きくなってた聡太に私はかなりドキドキして、足よりも心が痛かった。

今私がかくつついている聡太がいなくなるなんて嫌だ。

聡太を見て騒いでいる、何処かの誰かに取られたくなんかない！

・・・でも、この気持ちを伝えたとしても、断られたら？

朝玄関を開けても聡太がいない。

あの白い夢が現実になってしまいうんじゃないかって、それがとても怖かった。

宵闇の散歩道（前書き）

7 話目です。

ではでは。

宵闇の散歩道

転んだ葵姉を拾ってから益々ギクシャクしているような気がしてならない。

これは絶対に避けられている・・・よな？

僕、何かしたか？

負ぶわれる事に抵抗していたけど、そんな事でこうなるとは思えない。

転んだ現場を見られて恥ずかしがってたけど、そんな事でもないだろう。

朝はまともに顔を会わせないし、学校でもあまり見かけない。

このよく分からない状況に、葵姉がいない事に段々耐えられなくなってきた。

少しでも姿が見られたら、少しでも声が聞けたら、気がつけば僕はいつもそんな事ばかり考えている。

葵姉の存在が僕の糧で、今はそれが不足しているから、こつも落ちて着かないのだろう。

重症だな、胃まで痛いような気がしてきた。

僕の中のパズルの足りないピースは、紛れも無く葵姉だ。

でも、それだと美晴さんの言っていた事とは違う。

・・・本当に難しいな、あの人の課題は。

「おにいちゃん、暗い。」

「理佐・・・いきなり暗いって、酷くないかそれ？」

言われなくても分かっている事を、真正面からはつきり言われるとさすがに気分を害する。しかし妹は大きく溜息を吐くと、さらに非難を続けてくれる。

「暗いものは暗いの。家の中で雨が降りだしそうだから、外に行く

か悩むの止めてくれない？」

少しは遠慮しようとか言葉を選ぶとか、こいつにはそういう気遣いはないのか？

この妹はこんなものだと分かっているが、だからこそ腹が立つ。

さらに憎たらしい態度で携帯をいじり始めた妹の姿に、苛つときたが、僕は携帯と財布だけポケットに突っ込み外に出た。

・・・言いなりになった訳じゃない、これは気分転換だ。

外に出ると、もう日が暮れかかっている・・・俗に言う逢魔が刻つてやつか。人の存在は認識できるが、顔はよく見ないと分からない。すれ違った者が本当に人間かどうか分からない時間帯だなんて、昔の人は面白い事を考えたものだと思う。

西の空は必要以上の赤と、紫から紺に見事なグラデーションを成していて、思わず良い物が見れたと喜びかけるが、玄関先に突っ立つて空を眺めてるだけなのも虚しい。

これだと、本当に追い出されただけのようで、非常に情けない。

それにこの空は、どうせすぐに墨色に染まってしまふ。

とりあえず近くのコンビニにでも行くかと、魑魅魍魎の姿も晒してしまいそうな街灯の明かりの下を歩いた。

煌々と明るい店内の外からよく見える雑誌売り場の前に、見知った姿があった。

まだ家には帰っていないのか、制服姿のまままで何やら真剣に立ち読みをしている航に、店に入るなり近付いてみた。

しかし航はまったく気付き気配は無く、仕方なく声をかけた。

「お客さん、立ち読はちよつと・・・。」

「おうつ！？すみません！　って聡太か、脅かすな。」

一体何をそんなに読み耽っているのかと航の手元の本を見ると、どちらかといえば女性が好みそうな類の雑誌だった。

「占い？」

「そつ、気にならなねーか？」

気にならない訳じゃないが、そんなものは気にしない。

結果が悪くても悪くても、一々踊らされる気にはなれない。星座にせよ血液型にせよ、そんなもので性格や運命が左右されるとは思っていない。

たかが12種類、たかが4種類、それだけの種類で人を分けるのはどうなんだろう？

人が信じているのを否定する気はないが、押し付けられるのは御免被る。

「別に。・・・そんなに読み込むなら、買ったらどうだ？」

すると航は無言で雑誌の裏を指し示した。そこには当然値段が書いてあり、

「840円だな。」

「気にはなるが出すには惜しい、よつて立ち読み。You understand?」

航のくせに偉そうな態度だ。

満面の笑みを見せる姿に呆れて、投げやりに手を振った。

「はいはい。せいぜい頑張ってください。」

思い残す事無く、しつかり立ち読みしてくれ。

ドリンクコーナーでふと目に付いたアップルティーのソーダを買い、店を出ようとした所で、航が後ろを追いかけてきた。

「待て待て、俺も行く。」

「占いはもういいのか？」

「立ち読みだけじゃ、ないんだぜ。」

そう言いながら何故かまったく無意味なポーズを取り、オレンジジュースの入った袋をかざした。

店にいる間に日は完全に沈んでしまったが、街灯のおかげで歩くのに不自由は無い。そんな中を特に目的も無くブラブラと歩いた。

もちろんまだ帰る気にもなれないので、公園の方に足を向けると、航も当然のように横に並ぶ。

この町は海が近く風向きによっては潮の香りがする。

今も、日が暮れて気温が下がってきた事により、海からの風が陸へと吹き込み、ほんのりと潮の香りが運ばれている。それに混じって汽笛の音も微かにに聞こえ、何となく童心に帰ったような心地がした。

隣には相変わらず航がいて、小さかった頃のように公園へ続く道を二人で歩いている。

昔はよく汽笛の音を聞きながら、見えもしない船の姿を想像しあつた。

しかし、誰も船の姿を確認には行かないのだから、その問いに答えは存在しない。それでもなぜかお互いに意地を張り合い、自分の方が正しいと主張しあつて、よく葵姉にうるさいと怒られた。

目的地の公園は住宅街にいくつか設置された物の一つで、固有の特徴と言えば、昔の画家の石碑がある。でも誰もどんな偉い人かなんて知らず、もちろん調べる事もせず、ただそこによじ登って遊べる遊具の一つ・・・くらいにしか思っていなかった。

どこの公園にもある鉄棒にブランコ、ジャングルジム、半分埋まったタイヤに砂場。それら懐かしい物のすべては、街灯の明かりに照らされた一部が薄っすらと見えるばかりで、かなりの部分は闇に覆われていた。

小学生の頃は、よくここで航と遊んだものだが、それも久しく・・・
まともに来たのは何年ぶりなんだろう？

『用事が無い』ただそれだけの理由で、長い事ここに来る事は無かった。

その頃なら、こんな時間にここにいる事なんか絶対に無くて、薄暗くなる頃には家に帰っていた。決まった時間までに帰らないと親にひどく怒られたものだが、今は早く帰っても逆に親の方がいない。

街灯の下のベンチを二人で陣取り、ペットボトルの蓋を捻ると炭酸飲料特有のプシュツという小気味良い音が響いた。

「・・・お前の買う物は、時々わかんねーな。うまいのかそれ？」

「知らない。今日初めて見た。気になるから買ってみたんだ。」

「とりあえず一口飲んでみたが、これは・・・」

「外れかな。」

航は声を殺し、肩を揺らして笑っている。

「笑うなら堂々と笑え、余計に気になる。で、お前は何でオレンジジュースなんだ？」

「えー、ビタミンの補給？ 果汁100%だし。」

「・・・そっか。」

予想以下の答えに脱力しつつ、諦めて本題に入った。

「で、何か用か？」

「ん？」

「立ち読み切り上げてまで、ついてきたじゃないか？」

オレンジジュースを口のそばに近付けたまま、何を考えているものかしばらく黙り込んだ後、歯切れの悪い答えが返ってきた。

「あー、まあ聞きたい事はある。」

また少し黙り込み、真面目な顔をすると思いに大声を出した。

「聡太！」

「・・・な、突然何だ？」

「お前、ねーちゃんと喧嘩でもしてんのか？」

予想通りだ。

今、真面目な顔して話すような事は、それくらいしかない。

なのに航は少し必死で・・・ひよっとしてさっきの間は、言っていないかどうかを考えていたんだろうか？

「喧嘩なんかした覚えはない。」

僕だって、訳も分からず逃げられて困惑している。

弟にもその訳が分からないのかと、実はかなりがっかりした。それ

を期待して航を追い払わなかったのに、これでは意味が無い。

「正直、ねーちゃんの機嫌が悪くて困ってたんだ。何つーか、八つ当たり？」

・・・弟の宿命だろうな、それは。

多少の同情を抱きながらも、かける言葉が見つからなかった。

頭に浮かんだ言葉は『諦める』で、それだと追い討ちをかける事になる。

「何故か避けられてるみたいなんだけど、僕には原因が思い当たらない。」

「気付いてないだけで、何かしたんじゃないのか？」

「怒らせるような事をした覚えは無いよ。」

「まったく、何でもいいから早く仲直りしてくれよな。間にいる俺がきついんだ。」

そう言いながら情けない顔を見せる航が、実はかなり羨ましい。

こいつは家に帰れば、葵姉に当たり前のように会える。

・・・本当に、理由があるなら教えて欲しい。

溜息を吐いて何気なく上を向くと、街灯がかなりまぶしくて少し目が眩んだ。

千載一遇（前書き）

8話目です。

ではさようなら。

食欲の乏しい今、昼は適当に菓子パンで済ませて図書室に向かった。相変わらず答えの出ない問題について考えるため、静かであるう場所に向かったただけだ。屋上だと、また朋ちゃんや、もしくは航の乱入が考えられるため、あえて今日は避けた。そう、ただそれだけのつもりだった……のだが、この選択が別の意味で正しかった事に、図書室に入つてすぐ気が付いた。

ここしばらく、まったく会えなかつた葵姉が、本棚に近い席で頬杖をつき、何かの本を難しい顔して捲めくっていたのだ。

その姿を見つければ、僕の気分は一気に高揚する。

葵姉は機嫌が悪そうにも見えるがそんな事は構っていられない。ここで捕まえなければ次はいつ会えるか分からない。それほどまでに葵姉と出会える事が無くなった。

気付かれないように、できるだけそっと近付いたつもりだったのだが、本に影が入ったせいか葵姉はすぐに顔を上げてしまった。

……蛍光灯の光は計算しきれなかつた。

複数の方向からの光で複数の影ができる。その予測しにくい薄く短い影は、より近い場所に影響を及ぼす。

僕と目が合った葵姉は、一瞬後に逃げ出そうとし、思わず僕は葵姉の手首を掴んで捕らえた。絶対にこのチャンスを逃す訳にはいかない。

「何で逃げるの？」

「……えーっと、何でだろう？」

そうやって目を逸らし、わざとらしい言い訳をされるのはとても悲しい。

「何で避けるの？ 僕何かした？ 訳が分からなくて……もうずっと苛々してんだ。教えてよ、葵姉。」

場所をわきまえて大きな声こそ出さないものの、本当はそう叫びた

くてたまらなかつた。心の中ではもう泣いている。嫌われたんじやないかって、本当にそうだったらと思うと怖くてたまらず、必死に押さえつけてきた。

なのにやつと会えたと思つたら逃げようとして、わざとらしい言い訳まで聞かされて・・・本当に嫌われたんだつて、僕は完全に打ちのめされた。

でも、訳も分からず引き下がりはたたくはない。

納得がいかないまま退くつもりはない。

何年も葵姉の事だけを思つてきたんだ。そのくらいで諦められるはずがない。

遠慮がちに僕を見た葵姉は、今にも泣き出しそうな顔をしていて、ますます胸が締め付けられる思いがする。

葵姉は瞳を揺らし、何も言わずにしばらく対峙していたけれど、一度目を閉じ、次に目を開いた時には、何かを吹っ切った様に顔が変わつた。

「言いたい事・・・全部整理してくるから時間頂戴。」

「・・・葵姉？」

いつもの強い光の宿る、でもとても真剣な目に気圧されて僕は動けなかつた。

「私もモヤモヤして嫌だつたの・・・ああもう、私らしくない！」

明日は土曜だから港の公園で・・・そうね、10時？ 一晩でまとめて来るから覚悟してなさい！」

葵姉は、その勢いよく言い放つと掴んでいた僕の手を振り払い、きちんと本を棚に戻してから図書室を出て行つた。

呆気にとられた僕はそのまま動けず、「図書館で騒がない」と司書の先生が飛ばした叱責を一人で請け負う事になった。

明日の10時に港の公園・・・きつとそこで僕の抱えている疑問は晴らせるのだろう。

結局逃げられてしまったのだけれど、明日も会えると思えば気分は悪くない。

・・・ただ、僕は一体何の覚悟をすればいいんだろう？
その内容によつては、当然もうこんな気分ではいられなくなる。
明日がとても楽しみな反面、やはりとても不安で・・・本当に僕は
悩んでばかりだな。

一晩明けて約束の土曜の朝。仕度をして出かけようとすると、リビングの定位置に転がっている妹に声をかけられた。こいつは携帯から手を放すという事はないんだろうか？

今も何かキーを押し始め、何か悪巧みの相談をしているようで油断ならない。

「ねえ、どこ行くの？」

「ちよつと出かける。」

「それ、質問に答えてないし・・・」
当たり前だ。わざと答えてないんだ。

「私も・・・友達と買い物行く約束があるから、そろそろ出なきゃいけないんだけど、途中まで一緒に行かない？」

珍しい事を言い出した。無理やり引っ張っていかれた事や、途中で呼びつけられた事はあるけど、こんな事は初めてだ。その動揺が油断を招いた。

「行かない。方向違うし、公園に行くだけだから。」
そうつい口走ってしまった。

「へー方向違うって事は港のどこ？」

「あ・・・うん。」
「そっか、じゃあ気をつけてね。」

誘ってきたくせに、今度は手のひらを反したようにあっさりと引き下がり、まるで心のこもってない声で送り出された。
・・・これはやっぱり絶対何か企んでいるらしい。

ただ僕の行き先を、聞き出したただけだな。
気になつて落ち着かない部分はあるが、時間を考えればもう出なけ

ればならない。

僕にとっては、二人の予測不能な畏より、葵姉との約束の方が遙に重要な案件だ。

そう自分に言い聞かせて港の公園に向かった。

始まる時間（前書き）

の語田です。

じまじいん。

始まる時間

公園に着くと葵姉は既に来ていた。

かなり広い公園なのに、具体的な場所なんか指定されていなかった
ので、着いてから探す事になるのかなと考えていたのだけれど、そ
の心配は必要無かった。

葵姉はアーチをくぐったすぐ先にいて、何故か腕を組んで目を閉じ
・ ・ ・ 何かを考えているらしい。

「5分前に着くように来たのに、葵姉早いね。」

「え、も・ ・ ・ もう来たの!？」

なんだかとても慌てていて少しおかしくて、その仕草がかわいかつ
たが、公園に立つ時計に目を向けた葵姉は、理不尽な文句を言い出
した。

「もう、まだ早いじゃない、何で来たのよ!？」

「何でって呼ばれたから。そんな事で怒られてもな・ ・ ・ 待たせて
も悪いからと思って早く来たんだけど。」

葵姉は顔を赤らめ、ばつが悪そうに黙り込む。

「で、何の覚悟をしたらいいのかわかんなかったんだけど? ・ ・ ・
歯を食いしばって、しっかり立ってる? ・ ・ ・ とか?」

とりあえず悪い方の予測の1つを冗談っぽく口にした。別に殴って
気が済むのならそれで構わない。それくらいで済むのならいくらで
も殴られてやる。

僕は、嫌われて会えなくなるのが一番辛い。それだけは絶対受け入
れられない。

「何それ、いつの時代よ?」

葵姉は吹き出して、何となくいつもの姿を取り戻したような気がす
る。入り過ぎていた力が抜けて自然体・ ・ ・ って言うのかな? い
つもの穏やかな感じが戻ってきた。

「あれ? 僕怒られるんだとばかり思ってたんだけど、違うの?」

そう、大半の予想はそんなものばかりだ。怒っている理由には心当たりが無いけれど、きつとどこかで怒らせたのだろうと、そこから考える事を始めていた。

「何で私が聡太に怒らなきゃいけないの？」

「さあ、僕にも思い当たるふしは無いんだけど。」

「・・・私、怒ってないし」

葵姉は憮然として顔を背け、僕は少し安堵した。

「じゃあ、何で避けてたの？」

やっぱり分からないままの答えを彼女に促すと、消え入りそうな声が耳に届いた。

「・・・恥ずかしかつたの。」

「え、足を踏み外したのそんなにショックだった？　僕は見ちゃいけないもの見ちゃったって事？」

「そつちじゃなくて！」

「じゃあ何!？」

そう全力で否定されると、不安でいっぱいいな僕は、声に陰しいものが混じってしまい、葵姉を少し怯ませてしまった。しまったと思つた所で、もう取り返せない。

「・・・いつの間にそんなに大きくなつてんのよ。」

再び消え入りそうな声で紡がれた言葉に、僕は困惑した。

「は？　そりゃあ時間は過ぎてくもんだし、ずっとちっちゃいままつて人は・・・」

「ああ、もう!」

僕の困惑からくる正論を、途中で切りズカズカと近付いてくる。

「って、やっぱり怒ってる?」

「怒ってない!!」

言葉とは裏腹な表情のままどんどん近付いて来て、止まらない。やっぱり殴るんじゃないかと、思わず目を瞑ると温かく柔らかいものに包まれた。

「葵姉?」

驚いて目を開けると、首に手を回されて抱きつかれていた。
・・・やっぱ訳が分からない。

直接肌を通して伝わる温かさ、触れる体の柔らかさ、そしてどこか甘い香りに頭が痺れ、益々混乱する。

思わず抱き返したくなる両手と本能を何とか堪え、まずはこの状況を整理しなければならない。

「・・・えーと、質問して良いかな？」

「うん。」

僅かに頷く葵姉は、こんなに小さかったっけ？ と驚いた。

もちろん性差を考えれば当然なのだが、葵姉は僕の中でずっと大きな存在で・・・。

その彼女の背を抜いたのはいつだったか、はつきりとは覚えてないが、結構前の事だ。いつの間にか抜いていた背はまたさらに差が開いていて、今は20cm近くはありそうだ。

「・・・今、抱きついてるよね？」

「うん。」

「・・・あのさ、僕ドキドキするんだけど？」

「・・・うん、私も。」

肯定の意思は示されるものの、やはりその理由は示されない。

「・・・何で抱きついてるの？」

「ばか。」

遠回しに聞く事を止め、直接的な質問をすると、首に回された腕に力が加えられ少し痛い。しかしやはり、明確な答えは返って来ない。

「・・・えーと。」

「察してよ、ばか。」

しっかりと抱きつかれた状態では、真横にある彼女の顔を窺い知る事はできないけれど、でもきつと・・・僕の希望の予測が叶ったと考えていいのだろう。

ごく低い可能性として考えていた、理想の予測だ。

僕はゆっくりと彼女の背に手を回し、力を込めた。

「これで正解？」

「・・・うん。」

僕の恐る恐るの質問に、微かな嬉しそうな声で答えてくれた。

「ところでさ、さっきから「うん」とか「ばか」とかしか聞いてないんだけど・・・言いたい事を纏めて来たんじゃないの？」

僕は耳元で囁いてみた。

この感触は忘れようが無いけど、やっぱりきちんと言葉で聞かないと不安が残る。

それだけこの会えなかった時間はきつかった。

同じ想いを抱えてるなんて考えもせず、ただただ不安だけを募らせて、段々病んでいくような気がしていた。

だから言葉はとても大切で、きちんと伝えていかなければならないと思う。

「・・・ずいぶん意地悪ね、聡太。」

「そう？ 言葉で聞きたいだけだよ。さあどうぞ。」

葵姉を促すと、耳元で甘美な言葉を囁かれた。

「・・・好き。多分ずっと前から。」

「うん、僕も。」

「聡太ずるい・・・」

思わず肩から顔を離して抗議してきた瞬間にキスをした。

唇を離し、真っ赤になっていた葵姉に、

「僕も、ずっと前から好きだったよ。」

そうきちんと伝えると、

「・・・よかった。」

と、そう微かな声がして涙がこぼれるのを見た。

その時ようやく言葉の意味が分かった。

「パズルのピースは他のじゃ駄目。決まった形でないと嵌まらない。」
正直、途中からそれ所じゃなくて美晴さんの言葉すら忘れていたけど、不意に思い出して納得した。

僕達はお互いに、お互いからの言葉を求めあっていた。だから、他の誰からの告白にも応える事はなく、よって心配する必要も無い・・・と。

葵姉の言葉が僕の中に嵌ったように、僕の言葉が葵姉の中で嵌った。さすが悪魔だ。

人の心の中までお見通しで、あえて惑わせる言葉を用いる所がまさしくそれだ。

あの人にはどうやっても敵わない・・・

葵姉の涙を拭いながら、これからの事に思いを馳せた。
とりあえず今日は、まだお昼にもなっていない。

僕達の関係が変わった最初の日。

「じゃあまたね」って、ここで葵姉と別れる気なんかもちろん無い。今迄のように、少し言葉を交わすくらいでは、もう満足できないから。

これからの時間を思うと、僕は嬉しくて嬉しくて仕方がない。

始まる時間（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
楽しんで頂けたなら、幸せに思います。

最初に書いた時は、キャラが今ほど固まっていなかったもので、今回書き直してみても、聡太くんは随分とリアリストで、計算高くて、理屈っぽくて、臆病だなと再発見。
でも、大きく逸脱してはいない筈なので、最初からそんなイメージだったのかな？

ほかで使った台詞は、変えないようにしようと思ったんですが、どうしても気に入らない所を、1文字だけ変えました。
被って無い所は、内容変えずに表記を変えた所多数です。
まったく触らずは、さすがにちょっと無理でした。

聡太の妹の理佐が、美晴と組んで何やってたかは、「大人になるまでに。」の最終話をごらん下さい。
そこに書いてあります。

では、次もがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463s/>

大好きな人。

2011年4月13日22時40分発行